

『平家物語』 忠度都落の表現

——漢詩文の受容をめぐって——

北 山 円 正

一

寿永二（一一八三）年七月二十五日、京へと攻め上る木曾義仲の勢いに抗し切れず、平家一門は幼い安徳天皇を奉じて西国へ向かった。都落ちである。再起を期した離京のはずだが、衰勢は覆いがたい。『平家物語』は、平家の公達らが都を離れる様子を取り上げている。その一人薩摩守忠度が藤原俊成と対面する場面（「忠度都落」）を次のように描く。

忠度はいったんは都を出たものの、引き返してこれまで和歌の教え受けてきた五条三位俊成の邸を訪う。「忠度」と名告ると、突然の落人の来訪に邸内はざわめく。そして、俊成に告げるべきことがあると言うと、その人なら苦しからずと門を開けて対面する。忠度は、一門の運命は尽きたと述べた上で、

撰集のあるべき由うけたまはり候ひしかば、生涯の面目に、一首なりとも御恩をかうぶらうと存じて候ひしに、やがて世の乱れ出で来て、その沙汰なく候ふ条、ただ一身の歎きと存

じ候ふ。世静まり候ひなば、勅撰の御沙汰候はんずらん。これに候ふ巻物のうちに、さりぬべきもの候ひなば、一首なりとも御恩を蒙りて、草の陰にてもうれしと存じ候はば、遠き御まもりでこそ候はんずれ。

と、俊成が撰集すると聞く勅撰和歌集に一首なりとも選んではいただけまいかと懇願する。いずれ戦場の露と消えるはずの身と、覚悟した上での申し出であつた。そこで日頃の詠草から「秀歌と思しき百余首を書き集められたる巻物」を託す。対する俊成は、歌集を繙いて、

かかる忘れ形見をたまはりおき候ひぬる上は、ゆめゆめ粗略を存ずまじう候ふ。御疑ひあるべからず。さても只今の御渡りこそ、情けもすぐれて深く、あはれもことに思ひ知られて、感涙おさへがたう候へ。

と、都へ舞いもどる危険を冒して入集の希望を告げるといふ、和歌への執心に感嘆し、決して粗略には扱わぬと約束する。忠度は、これで思い残すことはないと思ひ、騎乗して西へ向けて去った。

その際、見送る俊成を背にして、

前途程遠し、思ひを雁山の夕べの雲に馳す。

と口ずさんだ。

やがて争乱は終息して世の中が落ち着き、俊成は『千載集』を編む。その時忠度の願いを忘れず、形見の巻物の中から一首選び、歌集に入れる。ただし「勅勘の人」ゆえに、名字を記すわけにはゆかず、「よみ人知らず」とせざるを得なかった。その歌は、「故郷花」と題する、

さざ波や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かな（巻一・

66・春歌上）

であった。

以上『平家物語』『忠度都落』の概略を述べた。高校の国語教科書にも採られる有名な件である。この一話については、文武に秀でた忠度の人物像、諸本間における俊成の態度の相違に着目した生成過程の問題、『千載集』の撰集や当時の歌壇との関わり、謡曲「忠度」「俊成忠度」を始めとする、後世の芸能との関わり等々、さまざまな面からの考究がなされてきた。本稿では、右に引いた忠度の、朗唱句と入集した和歌の表現内容を分析し、物語がこの詩句や和歌を取り上げる意図について、考えるところを述べてみたい。物語中に引用している漢詩文や和歌は、語り手（作者）の構想や意図を反映しているはずである。本文を読み解くことによつて、その一端を少しでも明らかにできればと思う。

二

忠度の朗唱句は、『和漢朗詠集』（巻下・632・錢別）の、

前途程遠、馳^二思於雁山之暮雲^一、後会期遙、霑^二纓於鴻臚之

曉淚^一。

を典拠とする。またこの四句は、大江朝綱「夏夜於^二鴻臚館^一錢^二北客^一」詩序（『本朝文粹』卷九・23）から引いたものである。

延喜八（九〇八）年五月に、来朝していた渤海使一行が帰国するに当たつて、鴻臚館において送別の詩宴が催された（『日本紀略』。なお日付を「六月某日」に誤る）。その際に朝綱がこの詩序を作成したのである。

渤海使の日本への到着から帰国に到るまでの流れを、『扶桑略記』『日本紀略』によつて辿れば次のとおり。正月八日、裴璆を大使とする渤海使一行の、伯耆国到着が醍醐天皇に伝えられ、三月二十日、存問渤海客使の藤原博文と秦維興を伯耆国へ発遣、四月二日、紀淑光・菅原淳茂を渤海掌客使に、小野葛根・藤原守真を渤海領客使に任命、同八日、藤原博文ら、入観使文籍院少監裴璆を存問、同二十一日、領客使ら曲宴を設ける、同二十六日に渤海客入京、同某日、醍醐天皇より渤海王へ書を賜う、五月十二日、宇多法皇より渤海大使裴璆に託して裴嬬へ書を賜う³。同十五日、朝集殿において饗宴を催し、渤海王へ物を、大使裴璆に御衣一襲を賜る。さらに渤海王に勅書、中台省に官牒、大使へ答礼の品を賜っている。そして、翌日以降に鴻臚館で饗宴があつて、間もな

く渤海使は帰国の途に就いたものと思われる。

朝綱の詩序は、三つに分けられる。その概要をまとめておく。

(第一段) 天下太平の今、我が国の徳化を慕って、北方から渤海国の使節がやって来た。天皇はその思いや労をよしとされ、恩恵を与えられた。

(第二段) この送別の宴は終わり、別れの時も近い。別れるのはたやすいが会うのは難しい。なかなかやって来ないのに去って行くのはあつという間だ。よくぞ使節が我が国を慕って遠路を苦にせず来られたと感じ入る。詩を詠じ酒を飲むのでなければ、この別れのつらさを和らげられそうにない。

(第三段) 船出の支度は整った。これで帰って行かれるのは恨めしい。長い旅路に就くことから、また会えるのは遠い先、それを思えば涙が流れる。私は非才で役立たずだ。恥ずかしいが遠来の客に、あえてつまらぬことを述べよう。

渤海国の使節が帰国するので、各段には日本との間の、隔たりの大きさを述べる表現を盛り込んでいる。その箇所を引いて、簡略な注解を付しておく。すでに柿村重松『本朝文粹註釈』と後藤昭雄『鴻臚館に渤海使を餞する詩の序―外交の文章(三)―』(『本朝文粹抄四』所収)が主な例を挙げて解釈している。ここではなるべくそれらの例との重複を避けて引いておきたい。

(1) 北客 算彼星躔、望扶木而鳥集、
朝此日域。涉滄溟而子来。

北客彼の星躔を算へて、此の日域に朝す。扶木を望みて鳥の

ごとく集まり、滄溟を渉りて子のごとく来たる。

「北客」は渤海使。「算^ス彼星躔」は、星宿を計測、計算するの意。日本の方角を知るために行う。「日域」は、日が出るところ、東方。ここでは日本の意。「中台省^{ミナトノ}牒^ノ曰、牒^ノ、奉^ス二処分^ニ」。

扶桑崇浪、日域^{ミナトノ}退邦^ノ」(『三代実録』貞觀元年五月十日条)は、渤海国の中台省が太政官に送った牒の引用。「扶木」は、扶桑に同じで、中国の東方海上の日の出るあたりにあるという神木。日本

のことでもある。「淮南子」・地形訓に、「扶木^ノ在^ス陽州、日之所^ニ暱^ス」とあり、高誘注に「扶木^ノ扶桑也。在^ス湯谷之南」と見える。「臣諱疏^ス潤天津、分^ス景扶木^ノ」(『日本後紀』大同元年五月一日条)の「臣」は伴親王(後の淳和天皇)、この例では皇統に連なる身であることを言う。「鳥集」は、群がり集まるさまを表す。「北客」の来朝を喻える。「秦信^ノ左右^ノ而亡、周用^ス鳥集^ノ而王^ス」(『文選』卷三十九、漢の鄒陽「獄中上書自明」。李善注「漢書音義曰、太公望塗^ス遇^ス卒遇^ス、共成^ス王功^ノ」如^シ鳥鵲之暴集^ノ也」)は、周の文王が、鳥が集まるようにやって来た太公望呂尚と出会ったことを言う。「滄溟」は青海原。滄海も同じ。渤海国との間を隔てる大海である。「賜^ス渤海王書^ノ曰、天皇敬問^ス渤海国王^ノ。使史都蒙等、遠渡^ス滄溟^ノ、来賀^ス踐祚^ノ」……(『統日本紀』宝龜八年五月二十三日)は、渤海国の使者

がはるばる海を渡ってやって来たことを言う。「子来」は、子が父母を慕うように、民が徳ある君のもとに集まる意。「経始勿^レ亟^ス」(『毛詩』・大雅・文王之什「靈台」。鄭

箋「度」始靈台之基止、非^レ有「急成之意」、衆民各以^三子成^二父事「而采攻之」にもとづく語。文王は靈台の造築を急いだのではないけれど、庶民がその徳を慕い、子が親のために集まるようにやって来て、力を尽くしたということ。「子[○]来[○]之民、謳歌之輩、異口同辞、号曰^三平安京^二」（『日本紀略』延暦十三年十一月八日）は、平安新京へ集まってきた民。

(2) 想彼 梯山航海、凌風穴之煙風、依々然莫不感忘遐之誠焉。
廻棹揚鞭、披亀林之蒙霧、

彼の山に梯し海を航りて、風穴の煙風を凌ぎ、棹を廻らし鞭を揚げて、亀林の蒙霧を披くを想へば、依々然として遐を忘れたる誠に感ぜざる莫し。

「梯山航海」は、山にはしこを架けて登り、船で海を渡る意であり、遠路を苦勞して旅することでもある。南朝宋の顔延之「三月三日曲水詩序」（『文選』卷四十六）の「棧山航海、踰沙軼漠」（李善注「楊雄交州箴曰、航海三万、束牽其犀」）は、他国からの貢物が、山を越え海を渡ってもたらされることを言う。『統日本紀』宝龜三年二月二十八日条の「昔高麗全盛時、其王高氏、祖宗奕世、介居瀛表、……帆海梯山、朝貢相統」（「瀛表」は大海、海外）は、高句麗が海山を越えて朝貢しつづけたと言う。「風穴」は、北方にある寒風が吹き出る地面の穴、風のわき出る穴。梁の劉峻「弁命論」（『文選』卷五十四）の「敬通鳳起、摧迅翻於風穴」（李善注「淮南子曰、鳳皇之翔、敬通鳳起、摧迅翻於風穴」）（李善注「淮南子曰、鳳皇之翔、至德也。濯羽弱水、暮宿風穴。許慎曰、風穴風所從出」）

は、後漢の馮衍が鳳のように飛躍したものの、その翼を風穴から吹く風に折られたという。「煙風」は霧やかすみ。「廻棹揚鞭」は、船を操り馬に鞭を当てる。「亀林」は、西域のウイグル族が居住する地域。『新唐書』（卷二一七・列伝第一四二上・回鶻）に「同羅在薛延陀北・多覽葛之東、距京師七千里而羸勝兵三万。貞觀二年、遣使者入朝。久之請内属、置亀林都督府」とある。初唐の李義府「和辺城秋気早」の「霜結龍城吹水照亀林月」は、詩に見える例。「蒙霧」は、濛々と立ちふさがる霧。「依々然」は、慕わしい思いを言う。「然」は助字。漢の蘇武「詩四首」ノ二（『文選』卷二十九）の「胡馬失其群、思心常依々」（李善注「依依思恋之貌也」）は、群を離れた北方の胡馬が仲間を慕うさまを詠じている。小野美材「七夕代牛女一惜一晚更一応製」序（『本朝文粹』卷八・224）の「二星適逢、未叙別緒依々之恨、五更將明、頻驚涼風颯々之声」（『和漢朗詠集』卷上・213・七夕）は、惹かれあひながらも別れねばならない辛さを描いている。「忘遐」は、遠く隔たっていることを忘れる、長い距離をもとめない。『統日本後紀』嘉祥二年五月二日条の「飛颿不斷、望日域而忘遐、貢篚相尋、想遼陽而如近。眷其勤苦、良嘉乃誠」は、渤海国の使節に託す仁明天皇の国王への勅書であり、遠距離を厭わずに入貢してきた誠意を讃えている。

(3) 前途程遠、馳思於雁山之暮雲、
後会期遙、霑纓於鴻臚之晚晡。

前途程遠くして、思ひを雁山の暮雲に馳せ、後会期遙かにして、纓を鴻臚の曉涙に濡す。

「前途」は、渤海使一行の故郷への道のり。「雁山」は、山西省代原の北部にある山。雁門山とも言う。梁の江淹「別賦」（『文選』卷十六）に「遼水無極、雁山參雲」とある。その李善注に「海内西経曰、大沢方百里鳥所生。在雁山。雁出其間。」（『海内西経』は『山海経』所収）と見え、雁はこの山から出ると言う。初唐陳子昂「送魏大從軍」に「雁山橫代北、狐塞接雲中」とある。「後会」は、次にまた会うこと。裴瑋との再会。「纓」は、冠を固定するために結び紐。「鴻臚」は鴻臚館のこと。海外からの使節を宿泊させ、また接待した施設。『三代実録』元慶七年五月十二日条に、「渤海使帰蕃。是日遣参議正四位下行右衛門督兼近江權守藤原朝臣諸葛、……向鴻臚館、付勅書」と見える。

右の(1)・(2)は、日本と渤海との隔たりを強調し、その旅程の困難を乗り越えて来朝した誠意は忘れたいと高く評価する。そして(3)は、前聯で、これから帰路に就く渤海使の長旅と、遙か北方にある故郷に思いを馳せるのであらうと、心中を思いつけている。また後聯では、再会は遠い先であらう、それを思えば鴻臚館での別れの時、涙が我が纓を濡らすと述べる。渤海国の大使裴瑋らと日本側の朝綱ら応対に当たった人々との間に、深い交流のあったことを思わせる。

「忠度都落」に戻って、忠度が「前途程遠、馳思於雁山之暮

雲」を朗誦して、改めて西下した時の表現について考えてみたい。右に述べたように、朝綱は渤海使らの心境を想像して描き出している。これに対して、忠度はこれからの己の旅路に思いを馳せて、この二句を詠じたと云えるであらう。迫り来る木曾義仲の強大な軍勢との戦を避けて都を落ち、遙かかなたの西国へ向かうしかし、再起を期するための「前途」は「程遠」い。都落ち自体が、一門の衰退・凋落の、何よりの証である。権勢・榮華の座から滑り落ちた辛さ・苦悩を噛みしめたにちがいない。後句「馳思於雁山之暮雲」は、渤海使一行のように、懐かしい山を心に浮かべているのではなく、いつ終わるとも知らぬ、苦難の道のりを想起していることになる。物語本文では、忠度の朗誦句は右の前聯を引くのみであるが、対をなす後聯も念頭にあったものと見ねばならない。典拠である『和漢朗詠集』の摘句は、「後会期遙、霑纓於鴻臚之曉涙」まで引いており、これも含めてこの場面を検討するべきである。そうすると後聯は、忠度からすればどのような心境を映し出したことになるのであらうか。

「後会」は、師である俊成との再会である。後に歌会・歌合などの場で相まみえて、和歌を詠み語らい、教えを受けつつ交流し、風雅の道とともに極めようとするのであらう。そのためには、源氏との戦に勝利し、京へ戻ってこなければならぬ。しかし、衰勢を自覚し、西下を余儀なくされる身には、望みは叶わぬと、忠度には思えたのである。

君はすでに都を出でさせたまひぬ。一門の運命はや尽き候ひ

ぬ。

これに候ふ巻物のうちに、さりぬべきもの候はば、一首なりとも御恩を蒙りて、草の陰にてもうれしと存じ候はば、遠き御守りでこそ候はんずれ。

今は西海の浪の底に沈まば沈め、山野に屍をさらさばさらせ、浮世に思ひおくこと候はず。さらばいとま申して。

忠度が語るこれらのことばには、一門および我が身の命運を見定めた覚悟がうかがえよう。「期遙」と口ずさむものの、じつはこれで今生の別れというのである。さらに「霑」櫻於鴻臚之曉涙」、つまり離別の涙が頬を伝い櫻を濡らすのは、その時の忠度の心のうちそのものであらう。忠度は、「三位後ろを遙かに見送つて立たれたれば」を承けて朗誦しており、己の苦衷・覚悟のほどを改めて、俊成に伝えようとしたと見てよいであらう。

一方の俊成は、西国へ下る忠度の「前途」、つまりその苦難に「思ひを馳せ」る。物語の「俊成卿いとど名残惜しうおぼえて、涙を抑えてぞ入りたまふ」は、「後会」の望みの空しいことを噛みしめつつ、別れの涙を流しているのであり、朝綱の詩序の後聯が描く诗情と重なる。

この別れの場面は、よく知られた朝綱の詩序の摘句を活かして、二人の悲歎や、凋落の一途を辿る平家の悲劇の一端を語ろうとしていると見て取れよう。摘句の内容とその朗誦は、この別れの場面と深く関わっているのである。

三

元暦二（一一八五）年三月二十四日の壇ノ浦合戦をもつて源平の争乱は終結する。平穩を迎えて、やがて俊成は改めて「千載集」の撰集に着手する。そこで思いおこすのは、今は亡き忠度が、自詠百余首の巻物を託した時の様子であり、言い残した言葉であった。あわれを催すにつけ、その念願を叶えようとする。また採歌に値する数々が巻物にはある。しかし、「勅勘の人」故に「名字」を示すわけにはゆかない。⁽⁵⁾そこで、「故郷花といふ題にて詠まれたる歌一首」を「よみ人知らず」として、選り入れたのであった。それが次の歌である。

故郷花といへる心をよみはべりける

よみ人知らず

さざ波や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かな⁽⁶⁾（巻一・66・春上）

『忠度集』の詞書には「為業歌合に、故郷花を」とあり、承安・安元の頃に催された歌合での詠である。⁽⁸⁾物語のとおり、忠度の願いを聞き届けて、『千載集』に採り入れたのかどうかは定かではない。もとよりそれが事実か否かは、物語の内容・主題とは関わりを持たない。したがってその穿鑿は、物語の理解とは直接には結びつかないだろう。ここで問題にしたいのは、なぜ『平家物語』の「忠度都落」にこの歌を引いたかであり、それがどういう意味を持つかである。

忠度がこの歌を詠じるにあたつては、それを踏まえたと思しい和歌がある。

さざ波や志賀の都は荒れにしをまたすむものは秋の夜の月
久安五（一一四九）年の右衛門督家成歌合における、隆長（藤原清輔）の詠（秋月・五番）である。上句が一致するほか、一首の趣旨も同じものである。さらに溯つて『万葉集』（巻一・29）の、「過近江荒都」時、柿本朝臣人麻呂作歌」と題する長歌と、その反歌、

楽浪の志賀の唐崎幸くあれど大宮人の船待ちかねつ（30）

を、先蹤歌と見てよい。かつての近江京を訪れた人麻呂が、荒廃した地でおぼえた感慨を詠じている。忠度はこの二首の主題を念頭に置いていたのである。

人麻呂が詠むに当たつては、中国文学に通底する、人の生と自然との対比によつて生まれる嘆きが背後にはある。これらの作品の流れの上に、『平家物語』の忠度詠が位置づけられることや、一話におけるその意味を次に述べてみたい。

人麻呂の長歌の後半には、

大宮はことと聞けども 大殿はことと言へども 春草の繁く
生ひたる 霞立ち春日の霧れる ももしきの大宮人の 見れば悲しも（29）

とある。荒都にたたずむ人麻呂は、数々の殿舎があつたという地を眺め、「春草」の繁茂する有様に悲しみをおぼえている。この廃絶した宮都または家屋を訪れて、往時を偲びつつ現況に心を痛

めるという形式の作品については、中国文学に先例がある。⁽⁹⁾

ヤヌルカガ
已矣哉、春草暮兮秋風驚、秋風罷兮春草生。綺羅華兮池館
尽、琴瑟滅兮丘壟平。自^レ古皆有^レ死、莫^レ不^二飲^レ恨而吞^レ声

（『文選』卷十六、梁の江淹「恨賦」）

魯国親^二遺殿^一、韓城想^二旧台^一。……夏蓮猶反植、秋窓尚^レ不開
……及^二君歆^二四望^一、知^二余念^二七哀^一（梁の庾肩吾「過建章
故台」）

雜樹本唯金谷苑、諸花旧滿洛陽城。正是古來歌舞處、今日
看^二時無^二地行^一（北周の庾信「庾子山集」卷四、「代二人
傷^レ往^二首^一」ノ一）

頽城百戰後、荒宅四鄰通。……林中滿^二明月^一、是処來^二春風^一。
唯余^二一廢井^一、尚夾^二兩株桐^一（隋の元行恭「過^二故宅^一」）

新豐停^二翠輦^一、譙邑駐^二鳴笳^一。園荒^二徑斷^一、苔古半階斜。前
池消^二旧水^一、昔樹發^二今花^一。一朝辭^二此地^一、四海遂為^レ家（初
唐太宗皇帝「過^二旧宅^一」ノ二）

「恨賦」は、引用の冒頭で如何ともしがたいと慨嘆するので、以下はその内容ということになる。すなわち、春草が終わるや秋風が吹き、秋風が止むと春草が生えると、自然が季節の推移にしたがつて巡り、「池館」「丘壟」が荒廃したままであるのとは異なる様子を描く。ここでは、季節は循環しており、その時になれば確かに風物が現れるのに対して、人の作つたものとは戻らないと述べて、「恨」を際立たせている。庾肩吾の詩は、長安にあった宮殿「建章」の旧跡を眺めて、「夏蓮」はまだ植えられて

いることと対比して悲しみをおぼえている。庾信は、ある地の荒

廢した様子を眼前にして、ここでは華やかな歌舞を繰り広げていたのにと慨嘆し、今ある木と花は、かつて金谷苑に生え、洛陽城に満ちていたのだと言う。花と木は昔と変わらず生きているというのに、時間の推移の中では人の営みは常ならずと、悲しみをおぼえている。元行恭の詩は、荒れはてた邸に立ち寄った時の嘆きを、林に降り注ぐ月の光、吹いてくる春風など、変わらぬ自然との対比や、今もなお二株の桐がここに在ると詠じることで強調している。太宗皇帝の詩は、旧宅を訪れたところ、庭園は荒れて園内の路は途切れ、階は傾いて古い苔が生えていた、また、池に湛えていた水は涸れてしまったが、昔からの樹には今も花が咲いているとある。かつて住んだ家は荒廢したもの、かつて目にした花は確かにここに咲いていたのである。この詩には、懷旧・悲嘆を強く訴える様子はない。「旧宅」を辞して今では「四海」つまり天下を「家」としていると、天下を治める皇帝としての自負がうかがえる。前三例とは趣を異にする。とは言え、人の営みの無常と自然の変わらぬ運行との相違は明らかに意識している。

荒都に立ち寄った時の人麻呂は、このような詩賦を踏まえてその感慨を描いたのであろう。壬申の乱によって近江京が灰燼に帰したのは、六七二年。人麻呂が近江の廢都を訪ねたのは、それから十数年の後かと言う。それまでに中国から伝来していた典籍を披見して蓄えた詩情を、ここに活かしたのであろう。もとより特定の詩文にもとづくとは言えず、同種の作品の数々が源泉となつ

たはずである。⁽¹⁰⁾

人麻呂の反歌は、「志賀の唐崎」は「幸く」つまり昔のまま変わらずにあるけれど、かつてのように近江京の「大宮人の船」がやって来るのを待ちかねていると詠じる。「唐崎」の地の不変と「大宮人」の無常とを対比している。長歌とともに、その詩想は忠度の和歌に引き継がれている。歌句の類似からすると、忠度は人麻呂や清輔の和歌を踏まえて詠じたことは確かである。ただこのような発想や表現は、特定の和歌からのみ生まれるのではなく、同類の詩文・和歌が背景にあるのが普通である。次に人麻呂以降の類似の表現を拾い上げて、後世に受け継がれていたことを確認しておきたい。

四

盛唐以降の詩には、次のような例がある。

旧苑荒台楊柳新、菱歌清唱不_レ勝_ク春。只今惟有_多西江月、曾照吳王宮裏人（盛唐李白「蘇台覽古」）

見る影もなく荒れた姑蘇台には、今もなお新たに柳が芽を吹く、昔のままなのは西の川に照る月だけだと、循環する季節の風物と不変の月が人の営みの無常を浮かび上がらせている。

国破山河在、城春草木深。感_レ時花濺_レ涙、恨_レ別鳥驚_レ心。

烽火連_二三月_一、家書抵_二萬金_一。白頭搔更短、渾欲_レ不_レ勝_レ簪

（盛唐杜甫「春望」）

国を治め民を統治する国家・朝廷が崩壊しても、山や川は厳然と存在し、長安の街には春がやって来て草や木が生い茂ると、人の作り営んだ秩序・体制の脆さと自然の確かさを鮮やかに描き出している。世の移ろいに左右されない自然をまのあたりにして、詩人はかえって傷ましい思いを深めたのであろう。

物在人亡無見期、閑庭繫馬不勝悲。窓前綠竹生空地、門外青山似旧時。悵望秋天鳴墜葉、巘岨枯柳宿寒鷄。憶君淚落東流水、歲歲花開知爲誰（盛唐李頎「題盧五旧居」）

物は以前のままでが、ここにいた人はもういない。「盧五」〔「五」は排行〕は亡くなっても、門外の山は在りし日のまま。君を偲べば涙が流れるが、河の水は変わらずに東へ流れ、この庭に毎年花は咲くだろうけれど、いったい誰のためだとか。盧某の旧宅を訪れて、ひとたび逝ってしまったもう戻っては来ない人と、不変の山と河、規則正しい自然の推移との明らかちがいに思いついている。

鶏犬喪家分散後、林園失主寂寥時。落花不語空辭樹、流水無情自入池。風蕩譙船初破漏、雨淋歌閣欲傾欹。前庭後院傷心事、唯是春風秋月知（『白氏文集』卷五十七・2799、「過元家履信宅」）。頴聯は、『和漢朗詠集』卷上・126・落花に収む）

元稹が没してその邸宅は寂しくなり、池の船は破損し樓閣は傾いてしまった。一方白居易の親友を悼む思いとは関わりなく、花が

散り水が流れる。人やその営為は無常であるが、自然はただ自らの営みがつづくのみである。

人麻呂が披見する可能性のある初唐頃までのみならず、盛唐以降も、人の命や営みのはなかさ・無常と、自然の不変や季節の規則正しい循環とを対比して、嘆きを深める表現・詩情は、引きつづいて見られる。言わば時代を超えて文学に横たわる詩想なのである。この詩想は日本の文学にもたらされる。人の生命や営為の頼りなさやかなさへの悲嘆は、どの国においてもあるはずである。日本にその詩文がもたらされ、これと出会った人々は深く共感するとともに、そのうた心を揺さぶられたにちがいない。それが人麻呂たちの詠歌を生んだのだと思う。

人麻呂以後のこの類いの表現を挙げて、その内容を説明してきた。

一旦辭榮去、千年奉諫余。松竹含春彩、容暉寂旧墟（『懷風藻』95、藤原万里「過神納言廢墟」）

諫言を呈して官を辞した大神高市麻呂の旧宅には、庭の松竹に春の光があるというのに、高市麻呂の姿はない。春は巡り来るのに人は移ろうものだと、そのはかなさを嘆いている。

緑柳依依白日斜、人蹤銷滅滿庭沙。只今暮宿簷間鳥、仍見旧春開砌下花。不記得平生排閣謁、無勝感悼望門嗟。駕肩來客知何在、未葬爭馳到勢家（『菅家文草』卷四・323、「春日感故右丞相旧宅」）

これは、春のある日、亡き右大臣源多の邸を見た時の感慨を詠

じた詩である。主のいない邸内には人氣がないものの、柳の枝葉が揺れ、以前のように石畳のそばの花が咲いていた。つまり春になればそれまでと変わりなく、枝葉を繁らせ花を咲かせる。しかしその人はいないと命の常無さを噛みしめる。それに右大臣の生前に参上していた人々は姿を消し、葬送が済まぬというのに、次の権勢家に向かう始末と、浅薄な人情に皮肉を浴びせる。

次に『源氏物語』の中の一例を取り上げておこう。賢木巻において、桐壺院の諒闇が明けた年の正月、光源氏は藤壺の邸を訪ねる。すると、世間の賑やかさとはうって変わって、前年に引きつづきしめやかな勤行の聲が聞こえてきた。そこからはかつて頻繁に参上していた上達部の姿が消え、この邸を通り過ぎて、権勢を手にした右大臣の邸へ向かっていた。藤壺邸の静寂と権力の凋落を印象づける場面である。そんな中光源氏は、「解けわたる池の薄氷、岸の柳のけしきばかりは時を忘れぬなど、さまざまながめられて」と、庭の池は氷が解け、岸辺の柳は芽吹いていると、巡り来る春の息吹に眼をやるのであった。人が権力や繁栄から遠ざかってしまい、ひそやかな暮らしに転じたとしても、自然はそれとは関わりなく、「時を忘れ」ずやってくることを示している。この点は右の道真の詩に言うところと等しい。ともに盛時のとどまらぬことや人の心の非情さを描き出しているのである。

敦光朝臣、江帥の旧宅を過ぐとて、

往事渺茫共^レ誰語、閑庭唯有^二不^{モイハ}言^ハ花^一。

と作りたりける、いとあはれにこそはべれ。

（『古今著聞集』卷十三・457・哀傷、「藤原敦光、江帥の旧宅を過ぐとて秀句の事」）

この「敦光」は藤原敦光。平安後期の鴻儒。「江帥」は大江山房。同じく平安後期を代表する儒者。敦光が匡房の旧宅を訪ねたところ、往事とともに語ることでできる主人はなく、静かな庭には何も言わぬ花が咲くのみであった。昔を知る花はまた咲いたけれど、私に話し掛けることはない悲しい胸の内を訴えている。

自然が変わりなく存在し、また四季が規則正しく循環する諸相と対比する時、人の生や人の営みのはかなさは際立ち、その無常に深い悲しみをおぼえる。人は、死や栄枯盛衰に直面し、また振り返った時に、感懐がこみ上げるものである。その表現のうち、旧都・廢墟・旧居等々を訪れて、かつての繁栄や故人を回顧し、現況との大きな差異を思い知り悲哀を抱くといった内容の表現を取り上げてきた。それら中国・日本の表現にはさほどの差違はない。日本における表現の多くが、中国でのそれを受容した結果そうなるのであり、日本人々が中国の詩文の多彩な表現に共感したことがうかがえる。もとより中国の詩文からの影響をこうむらず、万人が持つに違いない想いを描いた場合もあるが、大半はその影響下にある。それゆえにこのような表現が見るのである。忠度の歌は、直接には清輔の和歌にもとづいて詠じたのであるうし、さかのぼって人麻呂の近江荒都詠を踏まえていると見てよい。忠度が「さざ波や」の歌を詠んだ時には、右の歌だけが存在したのではない。類似的の発想を表現した詩歌文章が、手に届く

範囲にあったはずである。忠度がそれをどの程度披見し得たか、また学んでいたかは不明であるが、全く知識がなかったとは言えないだろう。その知見を念頭に置きながら自詠に活かしたのではないか。人麻呂と清輔の和歌は当然知識にあり、加えて中国・日本の詩歌等における表現が背景にあったと考えてよいであろう。

五

忠度が和歌に詠じるところを振り返っておきたい。「志賀の都」つまり近江京は繁栄していたのであろうが、今はもう廃滅してしまつた。それとは関わりなく、昔どりの山桜が咲いていることよと、いにしえの都の荒廃と、昔と変わりにくく今もお咲く桜の花とを対比して、人の栄華・殷賑が永続しないことに思いをいたす。そして深い悲しみをおぼえているのである。

『平家物語』が「さざ波や」の歌を「忠度都落」に引くのは、忠度の「さりぬべき歌いくらも」ある歌集の中から、俊成が選んで『千載集』に採った事実を伝えるためだけではないだろう。死を覚悟した忠度の和歌に執する風雅の心や、それに感じ入った俊成の優しさを語るためでもない。

また、忠度は俊成に、
草の陰にてもうれしと存じ候はば、遠き御守りでこそ候はん
ずれ。

今は西海の波の底にしづまば沈め、山野の屍をさらさば晒せ、

浮世に思ひおくこと候はず。

と、これから己が死出の旅路に就くであろうことを述べている。これからすると、俊成は、忠度が別れ際に語ったことばを想起して、戦場の露と消えたその命を哀れんで、この一首を選び出したとも言えるだろう。このようにさまざまな受け取り方があり得る。ただここは、今述べた理解を包摂した上で、栄華を極めた平家も、このように衰微・没落して西下を余儀なくされることを、忠度詠の、荒廃した近江京と、変わらずに毎年咲く山桜との対比によって示そうとしたのであろう。ひいては、やがて平家一門が滅亡することを暗示していると思われるべきではあるまいか。平家の現在および将来の象徴として、忠度のこの一首は意味を持っているように思う。

六

忠度が立ち去る時に朗唱した大江朝綱の詩序の一節と、俊成が『千載集』に採った忠度の和歌は、それぞれ物語の内容・展開と深く関わっている。さらには、平家一門の栄華が崩れ去り、はかなく命を散らしてゆくさまに対するあわれを、この物語の一つの主題と考えるなら、朝綱の詩序の一節と忠度の和歌は、この主題とつながる意義を有していると考えてよいであろう。本稿は漢詩文との関連から、『平家物語』の表現について検討を試み、作品におけるその役割や意義を見いだそうとした。この物語は、緻密

な計算によって、その狙いや主題に沿うべく表現を構築しているようである。その一つ一つを読み取ることがこの作品理解にとって肝要と言えるであろう。このように、物語の主題と結びついた表現が、作中の随所に鏤めてあるのではないだろうか。

注

(1) 忠度と俊成が対面する場面は、覚一本『平家物語』（日本古典文学大系）をもとにして要約した。本文の引用についても同書による——なお表記は適宜改めた——。

(2) 渤海使についての一連の記事は、醍醐天皇の御記を典拠とする。

(3) この書は、紀長谷雄「法皇賜『渤海裴頌』書」（『本朝文粹』巻九・182）。裴頌は裴璆の父。裴頌は、元慶六（八八二）年と寛平六（八九四）年に渤海大使として来朝している。後藤昭雄「宇多法皇の渤海使に賜ふ書」（『本朝文粹抄』四）二〇一五年十月・勉誠出版、所収）にその注解と論考とがある。

(4) この四句は、『江談抄』（第六・11）よれば、「此句、渤海之人流_レ涙叩_レ胸」と、渤海の人を感激させた。そして数年を経た時のことである。「問_二此朝人_一曰、江朝綱至三公位_一乎。答云、未也。渤海人云、知_下日本国非_レ用_二賢才_一之_上云々」、つまり渤海の人が朝綱がまだ「三公」（大臣）になっていないことを知って、日本は「賢才」を用いない国

だと批判したとある。

(5) よみ人知らずの和歌については、平安後期から鎌倉初期にかけての歌学書が、次のように述べている。

読人不_レ知ト書事可_レ有_レ儀。一ハ真実不_レ知_二作者_一歌、一ハ雖_レ書_二名字_一、世以難_レ知_二其人_一下賤卑陋之輩、一ハ詞ニ有_レ憚歌等也（『袋草紙』・撰集故実）

又清輔云、読人不_レ知とは有三様。……古今は蟬丸歌不_レ書_二名_一、後撰書之。如_レ此類多。詞花、西行如_レ此。又千載、平家依_レ為_二勅堪者_一、不_レ書_二名_一歟。

（『八雲御抄』巻二・作法部・撰集）

『八雲御抄』の傍線部分は、忠度の場合に該当する。

(6) この歌はほかに、『月詣集』（巻三・184・三月・古京花といふことをよめる）、『古来風躰抄』などに採られている。

(7) 『忠度集』の成立は、森本元子「『忠度集』に関する覚書」（『私家集の研究』一九六六年十一月・明治書院、所収）において、「寿永元年（一一八二）夏秋の間、賀茂重保の勧進に应じて、多くの歌人が自詠百首を撰び、賀茂社に奉納した中に、「忠度百首」なる家集も加えられたと見られるのではないか」と言われる説が妥当であろう。

(8) 注(7) 森本氏論考参照。ただし、その根拠を示しておられない。また、萩谷朴『平安朝歌合大成 八』（二四〇五ページ）は、仁安元年（治承二年）の「仁安に近い某年の春と推定」している。

(9) 人麻呂の近江荒都詠の表現については、小島憲之『国風暗黒時代の文学上』四一八～四二三ページ（一九六八年十二月・塙書房）、辰巳正明「近江荒都歌と荒都悲傷詩」（『万葉集と中国文学』一九八七年二月・笠間書院、所収）が詳しく述べている。本稿はこの両論考を参看した。人麻呂と同じく、荒廃した地の「春草」を詠じた中国の詩については、前野直彬「春草考」（『春草考—中国古典詩文論叢—』一九九四年二月・秋山書店、所収）がある。

(10) 人麻呂には、「柿本朝臣人麻呂、妻死之後、泣血哀慟シテル作歌二首」と題する歌の「短歌」に、

去年こぞ見てし秋の月夜は照らせども相見し妹はいや年離さかる

（卷二・211）

とある。月は去年と同様照らしているのに、亡き妻は遠ざかると、人の命の不定を嘆いている。この歌は、「去秋三五月、今秋還照レ房。今春蘭蕙草、来春復吐レ芳。悲哉人道異、一謝永銷亡」（『玉台新詠』卷五、梁の沈約「悼亡」）との発想、表現における類似が指摘されている。66番歌と同じく人麻呂の中国文学撰取が知られるとともに、相似た詩情の和歌を詠んでいることを確認しておきたい。

(11) この句は、詠作事情—亡き知己の家宅訪問—の一致と語句の類似—「林園失△主寂寥時。落花不△語空辞△樹」—からして、先に引いた白詩にもとづくと言えよう。

(12) 上條彰次校注『千載和歌集』（和泉古典叢書）は、「自然

の永遠相に触れて人事のはかなさを思う歌で、その逆ではないだろう」と、的確な理解を示している。